

項目	内容
名称	ウメ (梅) [英]Japanese apricot [学名]Prunus mume Sieb.et Zucc., Armeniaca mume Sieb.
概要	ウメは、古代中国より渡来したバラ科の実で、日本では漢方として、また民間薬として利用されてきた。中国では紀元前200年より、ウメを燻製にしたものを烏梅 (ウバイ) と呼び、中国の伝統療法として用いている。
法規・制度	■食薬区分 ・果肉、未成熟の実：「医薬品的効能効果を標ぼうしない限り医薬品と判断しない成分本質 (原材料)」に該当する。
成分の特性・品質	
主な成分・性質	<ul style="list-style-type: none">・リンゴ酸やクエン酸、コハク酸などの有機酸が含まれる。未成熟のうちに落果したのものにはかなりの量の青酸配糖体アミグダリン (amygdalin) が含まれる。種子の中の仁にもアミグダリンを含む。その他、シトステロール (sitosterol)、オレアノール酸 (oleanolic acid)、セリルアルコール (ceryl alchole) など。・梅の未熟果 (青梅) の果肉や成熟果の種核には青酸配糖体であるアミグダリンを含む。(財) 日本健康・栄養食品協会 (JHFA) 規格には安全基準としてシアン化合物 (HCNとして) が不検出であることが要求されている。アミグダリンは青梅に含まれる酵素エムルシンによりグルコース、シアン化水素、ベンズアルデヒドに分解され、ベンズアルデヒドは酸化して安息香酸を生ずる。
分析法	・HPLCを用いたシアン配糖体・ベンズアルデヒド・安息香酸の同時定量法が報告されている (101) (102)。

有効性

循環器・呼吸器	調べた文献の中に見当たらない。
消化系・肝臓	調べた文献の中に見当たらない。
糖尿病・内分泌	調べた文献の中に見当たらない。
生殖・泌尿器	調べた文献の中に見当たらない。
脳・神経・感覚器	調べた文献の中に見当たらない。
免疫・がん・炎症	調べた文献の中に見当たらない。
骨・筋肉	調べた文献の中に見当たらない。
発育・成長	調べた文献の中に見当たらない。
肥満	調べた文献の中に見当たらない。
その他	調べた文献の中に見当たらない。

ヒトでの評価

参考文献

- (29) 牧野和漢薬草大図鑑 北隆館
(18) 和漢薬百科図鑑 I /II 保育社 難波恒雄 著
(22) メディカルハーブ安全性ハンドブック 第2版 東京堂出版 林真一郎ら 監訳
(23) 天然食品・薬品・香粧品の事典 朝倉書店 小林彰夫ら 監訳
(101) 食品衛生学雑誌. 1992;33(2):183-8.
(102) 食品衛生学雑誌. 1992;33(2):189-95.
(2004276905) 皮膚病診療. 2004; 26(8):987-90.
(2004101545) 日本皮膚アレルギー学会雑誌. 2003;11(2):62-6.
(2007146428) 臨床皮膚科. 2007;61(2):132-4.
(2009266915)アレルギー. 2009;58(3-4):408.
(104) 調理科学. 1969;2(3):179-82.
[\(PMID:16415112\) Drug Metab Dispos. 2006 Apr;34\(4\):521-3.](#)